



三 進化 三

夏が終わり、秋になったある日、ヒトの体に、老化とは異なる変異が起こった。

「あっ」

若い女性が、自分の緑色の指の先が赤色に変色しているのに気付いた。

「あたし、爪は染めていないのに・・・」

その赤は、指から、手の甲、前腕、二の腕へとアメイバーが侵食するように広がっていった。そして、全身が赤く染まった。そのうちに、その女性と同様に、緑の皮膚が変色し、黄色や紅色に変わっていく人が少なからず発生した。それは、紅葉病と呼ばれた。もちろん、全ての人が紅葉するわけではなかった。

当初、体が紅葉した人たちは、皮膚の色が変色しただけで、特段、生活には支障は来たさなかった。それでも、周囲の人たちは、その見かけだけで気味悪がった。紅葉病に侵された人たちは、周囲の目を気にして、病院に駆け込んだ。

病院の医師たちは、その皮膚が赤や黄色になる原因を探ったものの、究明はできなかった。世界政府も、英知を結集して、紅葉病対策に取り組もうとしたものの、皮膚が変わるだけで、特段に、命に関わるようなことはなかったために、力の入れようは、やや弱かった。そのうちに、治るだろうという安易な気持ちがあったことも事実だった。

こうしたことから、赤や黄色に皮膚が変色した人たちの中には、緑色人種の中で、自分たちは紅葉人種だ、目立っていい、と誇らしげに街を闊歩する者たちも現れた。

季節は冬に入った。赤や黄色に変色した人々の皮膚の色は、あれほど鮮やかだった色が、次第に、枯れたようにくすんでいった。くすむぐらいならまだしも、皮膚がかさかさとなり、フケのように、体中から皮膚が剥がれていった。いくら、太陽の光を浴びても、エネルギーも栄養素も作ることができずに、体は衰えていき、最後には、身動きすら出来なくなった。

皮膚の色が変わるぐらいであった時には、人々は気にも止めていなかったものの、ベッドに横たわる紅葉病の患者を見て、伝染するのではないかと恐れた。世界政府も、人々の恐れへの反応に、これまで安穩としていたものの、批判を恐れてか、すぐさまに行動を取った。指の爪の先でも、お腹の一部でも赤く染まる紅葉病に侵された人たちを島や山奥の病院に隔離した。

患者たちは、何の治療も施されることなく、ベッドでただ横たわるだけであった。その患者たちの世話は、まだ自分で動ける紅葉病の患者たちが受け持った。食事の世話から、洗濯、風呂、清掃など、生活のすべてを患者たちだけ行なった。この病院から抜け出そうにも、十メートル以上の壁と武器を持った警備員たちが監視塔から見張っていたため、脱出することはできなかった。生活に必要な物資等は、壁の上から地面に投げ入れられた。それを、まだ動ける患者たちが拾い集めて、そこに住む人たちに分け与えた。

患者たちは、症状が悪化するうちに、次第にベッドで横たわったまま動けなくなり、ある日、首は項垂れ、決して、眼を覚ますことはなかった。その死体は、患者たちが、病院の敷地の中で燃やして、骨を埋葬した。病院からたなびく煙を見て、街の人々は、また、患者の誰かが死んだことを知り、紅葉病を伝染させる人が減ったことを喜んだ。

人々は、表向きには紅葉病と呼んだが、裏では、枯れ死病として恐れた。世界政府は、死に至る病ということで、今度は、誠実に対策を練る必要があると、専門の研究者を集めて、チームを作り、紅葉病の研究に専念させた。

その老化現象は、悲しいことに、また、恐ろしいことに、年齢、性別に関係なく、誰彼ともなく発生した。生まれて間もない赤ちゃんが、名前の通り、赤や黄色の肌のままで生まれることもあった。また、反対に、百歳になってから、通常老化に伴って紅葉する人たちもいた。とにかく、紅葉することが死の一里塚であることだけは判明した。ヒトは、その運命を受け入れざるを得なかった。逆に言えば、自分の皮膚が変色していくことで、自らの寿命を知ることができたのだ。

世界政府は、この現象を調査研究させたものの、やはり、理由はわからなかった。ただ、言えることは、いわゆる、老化を促進させるガン的一种ではないか、ということだけだった。ただ、首脳の一部の人たちの中には、この紅葉病が、人類の人口爆発に対処する人減らしの対策という意味では、都合のよい病気であるとの認識も持っていた。

海子は、自分の名前に誘われたわけではないものの、何故だか知らないが、海にやって来ていた。涙は泣き過ぎて枯れたのか、それとも体中の水分が渴ききったせいなのか、もう一滴も出なかった。このまま、海に入ろう。この世の絶望から逃れるためには、この世から体ごと逃れるしかないと思ったからだ。

海子はまだ二十歳前だった。高校を卒業して、大学入試に合格して、受験勉強から解放され、やっと自分の好きなアートの勉強に専念できると思った。大学も決まり、下宿先も確保した。地方出身の海子にとっては、大学は憧れの都会にあった。

これまで住んでいたところは、自転車があればどこまでも行くことができる地方であった。だから、都会の大学に決まった時には、電車や地下鉄での通学に憧れた。母からも、不動産屋の担当者からも、自転車で通える場所がいいですよ、と勧められたものの、駅の近くの下宿先を探した。

だが、実際に、気に入った下宿を訪れるために電車に乗ると、窒息するぐらいに乗客が満杯で、体は押しつぶされそうだった。また、すし詰め状態の満員車両からようやく抜け出して、下宿先のある改札口に向おうとしても、人波に押し流されて、目的とする場所に辿り着くのに多くの時間と労力を費やした。こんな生活を毎日送るのかと思うと、地下鉄等で通学するのが嫌になった。

こうしたことから、母や不動産会社の担当者の意見に従って、大学近くの下宿先を選ぶことにした。下宿先から大学まで、歩いて二十分で、自転車だと十分もかからない。坂もなく、平地であり、雨の日でも、無理なく通える距離だった。

地方から都会に来た海子にとっては、新生活への不安よりも、期待の方が勝っていた。そして、一人暮らしを始めて、少しは慣れてきたある日の事だった。

朝、目覚めて、顔を洗おうとした。ふと見ると、人差し指の爪の先が赤く変色していた。そう言えば、昨日、大学の友人と、アート作品の練習を兼ねて、自分の爪に色を塗ったことを思い出した。色彩やデザインがあまり気に入らなかったために、すぐに洗い流したはずだった。

だけど、実際には、残りの指の先はきれいに色が落ちていたが、人さし指だけは赤色が残っていた。また、色を塗る際には、金や銀色などを使ったものの、赤色は使っていなかったはずだった。

まあ、いいか。海子はゴルフのボール状の大きさぐらいのハンドソープの泡を手にとると、念入りに、両手でこすった。何度も、何度も執拗なぐらいにこすった。もういいだろうと思い、泡を水で洗い流した。泡が流され、次第に姿形を現す手。海子の視線は右手の人さし指だけを見つめていた。

だが、爪の先は、やはり赤色のままだった。爪の色は落ちていなかった。それでも、自然に色は落ちていくだろうと、別段、気には留めていなかった。それから一週間後、再び、友人たちが集まり、ネイルアートの練習をすることにした。

「あら、海子。もうネイルアートしているの？」

友人からの言葉に、海子は右手の指を見た。赤くなっているのは人さし指だけではなかった。五本の指全てが赤かった。まさに、紅葉状態だった。

「それも、両手じゃん」

同級生の言葉に、海子の顔は指の色とは反対に青ざめた。

「娘さんは、紅葉病です」

診察室では、医師の前に海子と母が椅子に座っていた。海子は、自分の身に何が起きたのか知りたくなくて、ただ、呆然としていた。反対に、母は、娘の身に何が起きたのかの理由がはっきりして、愕然とした。

医師は、これまでも、小さな子どもから、小学生、海子のような青春真っ盛りの若者や働き盛りの成年、役職級の中年、定年後の生活を楽しみにしている退職が近いサラリーマン、自分の存在がはっきりとしない認知症気味の高齢者まで、様々な人たちに、病名を告げてきた。人は、紅葉病と診断されると、それぞれ特有の反応を示したが、医師の方は、あえて、感情を抑えた対応をしていた。

世界政府は、紅葉病の原因は究明できなかったものの、それまでの研究の成果で、伝染性はないことだけは確証した。かつて隔離された人々はようやく自由の身となった。ただし、これまで、隔離された病院で長期間、生活をしてきたために、いざ、元の社会に戻れと言われても、すぐさまに適応はできなかった。また、その患者たちのうち、多数の人たちは、家族や友人は既に死亡しており、頼るべき人が誰もいなくなっていたのだった。皮肉にも、病院内で生活を共にした人々が、唯一の知人であり、これまで病気や世間と闘い続けてきた戦友だった。

世界政府は、紅葉病の隔離政策が間違っていたことを認め、紅葉病の患者たちに対して、多額の補償金を支給した。しかし、患者たちは、いくら補償金を貰っても、今更、誰一人知らない社会で生活することをためらい、これまで通り、病院での生活を続けた。この結果、社会での紅葉病に対する差別や偏見は、一応、取り除かれ、薄まった形とはなっていた。

「やはり、そうですか・・・」

母親はその言葉を発するのが精一杯だった。本当は、紅葉病ではない、と一縷の望みを掛けていたのだったが、その希望の糸は真ん中から寸断された。そして、隣に座っている娘の海子を顔は動かさずに、目だけで見た。海子の顔は、事実を知った蒼白状態から普段通りの頬に紅を差した状態に戻っていた。海子はようやく落ち着きを取り戻すことができた。そして、自分の両手を

見た。紅葉病は、爪から両手にまで広がっていた。

海子は大学を休学した。これまでも、人間はいつかは死ぬものだと思っていた。ニュースでは、毎日のように、交通事故や事件などで、人が死んでいた。また、身近なところでは、小学校から高校までの間、何人かの同級生が死んだことも知っていた。朝の、通学時間帯に、いつも、犬の散歩をしていた近所のおばあさんが、いつのまにか姿が見えなくなり、父や母から、そのおばあさんが亡くなったことも知った。

確かに、死は身の回りに普通に存在していた。だけど、死ぬ、死んでいくという人間の中に、自分が含まれているとは考えてもいなかった。死ぬ瞬間まで、自分が好きだったアートを追求したいという気持ちと、そんなことはもうどうでもいいという気持ちがないまぜになっていた。

「治療方法はないんですか」

母は、治療方法がないことはマスコミの情報等では知っていたものの、それでも、何らかの方法はあるはずだ、と自分に思い込ませた。それで、執拗に、食って掛かるように、まるで医師の責任で自分の娘が紅葉病にかかったかのように、担当医を攻め立てた。

「残念ですが、誰にでも起きる症状のようです」

担当医は、静かに、腕をまくり上げると、赤く変色した二の腕を見せた。

「紅葉病は、必ずしも、指の先から変色するとは限りません。しかし、少なくとも、体の表皮部分から変色していくようです」

母は、それを見て黙った。海子も担当医の赤く変色した肌を見た。

「お互いに、最後まであきらめずに、頑張りましょう」

これまで、現実の現象しか語らなかった担当医が、不確かな未来への希望の言葉を述べた。